

新連載

高校生のライティング上達のための

コーパス利用の試み

リレー連載・第1回

ライティング指導にコーパスを活かす

今井むつみ

Imai Mutsumi
(慶應義塾大学教授)

◆ライティングはなぜ難しいのか？

今までの学校現場での英語教育は、文法を理解し、文章を読解し、リスニングができることに重きが置かれていた。しかし、言語は本来自由に話し、書くことができなければあまり意味がない。日本人は一般的にこれがとても苦手である。外国語でアウトプットをするために必要なのはなんといっても語彙だろう。必死で英単語を暗記しても、いざ英文で何かを書こうとするときはほとんど役に立たない。これは英語学習者と英語教育者にとって、今でも共通する悩みだと思う。外国語を学習するときになぜライティングが困難なのだろうか？

ATMの音声指示のように決まりきった文を一方的に言うだけなら一対一対応の「点」の意味の単語からなる定型文を丸覚えしていればなんとかなる。しかし、文を書くときには、自分の表現したい内容をもっとも適切に表出できる単語を数多くの単語群から選ぶ必要がある。同じ類の内容を表現するのに、様々な表現が可能である。様々な選択可能性の中からどのことばを選んで表現するかは、例えば将棋でいくつもの可能な手筋の中から最善の一手を探すのと同じようなものである。語彙にもつ単語の数が少なければ、選択の余地はない。とにかく意味の近い単語1つだけを使い続けるしかないことになる。残念ながら、外国語学習の初心者はこの状況にいる。

ではたくさんの単語を知っていれば、的確な表現がすぐにできるのだろうか。必ずしもそうとは言えない。点でしかない意味で文を作り、文の意

味を表現することは難しい。どの範囲で(他のどの文脈で)その単語が使えるのかわからないからである。

例えば、日本語で「話す」表現にあたる動詞が、英語では say, tell, speak, talk, などの基本動詞として存在する。「考える」にあたる動詞も英語では think, consider, believe, assume, suppose, conjecture など多数ある。これらの動詞の意味は、一見互いに似ているが、それぞれ異なる意味が異なり、決してどの文脈でも交換して同じように使えるわけではない。それぞれの意味の違いがわからなければ、これらはライティングに使えることばのレパートリーにはならない。実際、学生に英語で何かを論評する文章を書かせると、ほぼ“I think”しか使わない。この問題は日本人の英語学習に特有のものではない。なぜ外国語学習者は、外国語で類義の語の使い分けを覚えられず、1つの単語に固執してしまうのだろうか？

外国語を学ぶということは、世界の区切り方を根本から学び直すことに等しい。しかし、人は外国語と母語の語彙のシステムが同じであると無意識に思いがちだ。その結果、一見対応する単語があると——つまり本来「面」である意味のどこかの「点」で2つの言語の単語の間に重なりがあるとき、その外国語の語が「面」としても母語の語の意味と重なると考えてしまうのである。

実はこのような思い込みを正すことはかなり困難で、外国語学習歴がかなり長くなっても学習者は類義の語の使い分けを覚えられず、1つの単語に固執してしまう傾向がある。次頁図下段のよう

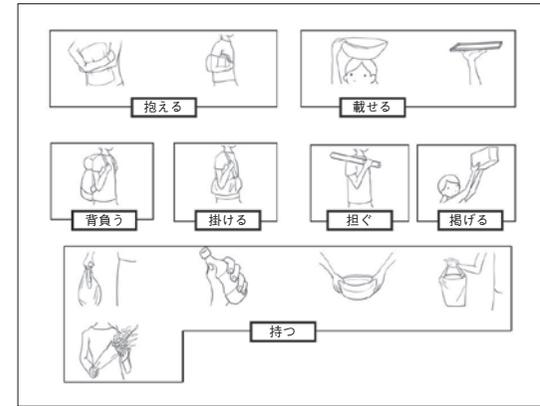


図 「持つ」の意味範囲

なモノを手を持つ行為は日本語では「持つ」という。日本語では、支える部位や持つ動作によって「持つ」「抱える」「背負う」「担ぐ」など複数の動詞で区別する。対して中国語は図の13の動作をすべて別の動詞で表す。筆者は日本語を母語とする中国語学習者がこれらの動詞の使い分けをどれくらいできるか実験で調べた。すると、学習者は日本語で区別する動作(例えば「抱える」「背負う」「担ぐ」など)にあたる動詞は覚えることができたが、日本語では「持つ」でひとまとめして区別しない動作の動詞はほとんど覚えられないということがわかったのである。

人は一度に処理できる情報に制限があるため、外界の情報のすべてに注意を向けることができない。そこで、見知らぬ情報を自分の知っていることに引き寄せ、それらを選択する。そのような知識の枠組みを「スキーマ」という。「スキーマ」はほとんどの場合、自分の経験に基づき、世界を直観的かつ素朴に捉えたもので、ある種の「思い込み」であるといえる。外国語を学習するとき、学習者のスキーマは母語についての知識である。個々の外国語単語の意味の範囲が訳語として当てられた日本語の単語と同じであるというスキーマのもと、学習者は覚えた単語を誤って一般化してしまうのである。この誤ったスキーマがあると外国語の単語の様々な使い方や意味での文を読んだり聞いたりしても、日本語訳語に合わない文例は全部スキーマのフィルターで取り除かれてしまう。例えば「考えるは think」と思い込んでいると、リスニングやリーディングで、think 以外の動詞

が何度出てきても、「あ、thinkと同じ意味ね」と思い、それぞれの意味を文脈から考えようとしなくて、記憶にも残らないのである。

この誤った思い込みを克服するために大事なことは、まず、単語同士のネットワークを大まかに掴むこと、つまり、それぞれの意味の分野にどのような単語があり、それぞれの単語がどのような関係で結びついているのかを知り、類似の単語同士の意味の違い、使い方の違いに意識を向けることだ。

◆コーパスを授業に活かす

このために有効なのはコーパスである。最近ではコーパス分析をするためのツールもどんどん進化している。単語が使われる多くの文例を一覧で見ることができただけでなく、他の単語との共起のしかたを探ることもできる。2つの類義の単語の共起のしかたを比べ、そこから意味の違いを考えることもできる。本連載では次回以降ネットでするツールを紹介する。高校や大学では、これらのツールを教室で使うと、英語語彙のネットワークを学習者がつくっていくために非常に有効であると思う。生徒が英語の語彙と日本語の語彙の構造の違いに気づき、日本語と英語の単語の意味が一一対一対応していないこと、英語の単語を日本語にただ置き換えていっても英語の語彙ネットワークはつukれないことに自分から気づけばしめたものだ。生徒が辞書とともにこれらのツールを活用してひとつひとつの単語の意味を深く探り、単語のネットワークを探索していく方法を覚え、それを自分で習慣的に行うようになれば、自律的にことばの世界を探究することが可能になるのである。

* * *

次回以降は福島県立原町高校の川村葉子教諭によるライティングの授業でコーパスの導入を試みた実践をご紹介します。どのようにコーパスを高校生に導入したか、コーパスを使うとどのような単語理解に有効か、どのような活動をして、生徒にどのような気づきがあったか、どういう時にうまく行かなかったか。読者のみなさん自身の英語学習と英語の授業の双方に役に立つ様々な情報を紹介していきたい。

高校生のライティング上達のための

コーパス利用の試み

第2回

コーパスを用いて1対1対応の語彙理解からの脱却

川村葉子
Kawamura Yoko
(福島県立原町高等学校教諭)

今井むつみ
Imai Mutsumi
(慶應義塾大学教授)

■先生、「見つける」は find out でいいですよ
ね？

みなさんは語彙・文法指導にどのように取り組まれているだろうか。生徒をライティング活動に取り組ませる時、私は語彙・文法を習得させることの難しさをひしひしと感じる。

生徒が書く活動をしている際、教師はたくさん様々な質問を受けることになる。「先生、〇〇は英語で何て言うんですか？」「『映画を見る』は see the movie でも watch the movie でもどっちでもいいですか？」「realize と notice は何が違うんですか？」「『見つける』は find out でいいですよ？」私はこういった質問に明示的に答えることが生徒にとってよいのだろうか（もちろん即答できない質問も多いのだが）と悩み、その場で一緒に辞書で調べたり、考えるヒントを与えたり工夫しようとするが、生徒は書き上げるとい目標があるため後者のやり方はあまりありがたがらない。

出来上がったプロダクトにどんなフィードバックを与えるかも悩みの1つである。意味重視で内容に対するコメントを書くのか。それとも添削をするのか。添削をするならどこに着目するのか。時制？ SV の一致？ 文章の論理性？ 生徒に共通する誤った表現？ 添削の際も悩みながらである。

例えば、生徒の英文を読み「この表現はだめじゃないかな」と思い辞書を引く。似たような例文は見られない。念のため ALT に確認すると「その表現で OK」と言われてがっかりする。その表

現は典型的なのかそれとも許容範囲なだけなのかと複数の辞書を使ったりネット検索をしたり。「これでは生徒にではなく私に英語力がついてしまう！」と冗談を言いたくなる。

こんな悩みを抱えていた時に、慶應義塾大学の今井むつみ先生からコーパスを生徒に使わせてみてはどうかというご提案をいただき、汎用コーパスである Corpus of Contemporary American English (COCA) をご紹介いただいた。COCA (<https://corpus.byu.edu/coca/>) はアメリカ英語の大規模均衡コーパスである。生徒達は、hear, listen, see, watch, look などの語の頻度や共起する語、例文を調べたり比較したりしながら、それらの語の違いについてだけでなく、コーパスとは何か、どのようにして使うのかを学んだ。

■生徒にコーパスを使わせる

COCA を使うと、調べたいキーワードがどういった文脈で使用されているのか (KWIC: key word in context)、コーパス上での頻度 (frequency)、どんな語と共起するのか (collocates)、他の語句との比較 (compare) などを調べることができる。またその語が使用されているジャンル (話し言葉、学術誌など)、使用年や例文の引用元なども知ることができる。

コーパスの規模、使用してわかる様々なことを考えると利点は多いのだが、実際に高校生が使うとなるといくつか問題もあった。パソコンやインターネットを使い慣れていない生徒は初期設定にかなり時間がかかること、インターフェイスが全

て英語のため苦手意識がある生徒にはハードルが高いこと、コーパスそのものについて知識がないため、情報量が多い COCA は複雑で、機能を理解して使いこなすのが難しいことである。

コーパスを初めて使用した生徒の反応としては、「面白い」という感想もあれば「どう役立つかわからない」「単語帳やリストで覚えた方が早いし、楽」という声もあった。授業と切り離してコーパスについてだけ紹介する形を取ったため、生徒に有用性が伝わらなかった。

■コーパス使用のタイミング

さて、ではコーパスはどのようなタイミングで使えば良いだろうか。生徒が自力で書いた英文をご覧いただきたい。

- ・ It is glad that I receive a letter.
- ・ Getting a letter is happy.
- ・ It is happy for me to receive a letter.

どんな日本語を英語に直したかすぐお分りになるだろう。もちろん、「手紙をもらうのはうれしい」である。このように複数の生徒に共通の誤りが出た場合、コーパスの出番である。glad や happy を使用した例文を調べたり、共起する語を検索することで、日本語の「うれしい」の使い方とは違うことに気づくことができる。

前回本欄でふれられていたように高1の生徒の中には英語と日本語の単語が1対1の関係お互いパズルのように並べ替えてあるように捉えてい

指導におけるコーパス利用のQ&A

コーパスを初めて導入した時、「単語リストの方が短時間でたくさん覚えられますよね？ コーパスを使う必要はありますか？」という感想を持った生徒がいました。単語リストかコーパスかという二者択一ではなく、補完し合うものという考え方でよいでしょうか。

今井の回答

英作文をするには語彙の量が必要です。学修しなければならない英単語の全部をコーパスで時間をかけて調べるのはたしかに現実的ではありませんね。ただ、連載1回目述べたように、生徒たちは、単語リストで訳とされている日本語の使い方や範囲がその英単語の使い方と同じだと無意識に思っています。だから「プレゼントはうれしい」と言いたいときに“Present

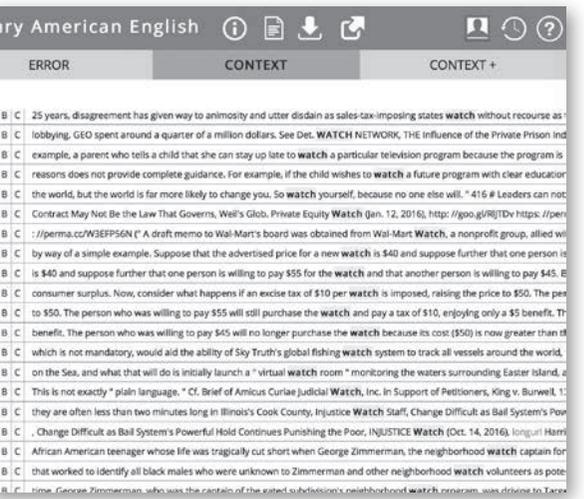


図 COCA の検索結果画面例 (watch の使われている英文)

る者もいる。『「見つける」は find out』の生徒は、日本語訳が『見つける』であればいつも find out が使えると思っている。生徒の頭の中で語彙と文法は切り分けられている。私はコーパスの実践を通して、生徒が帰納的に英語の語彙文法を捉えていくことにつながればと感じている。

また、コーパスは生徒だけでなく教師の役に立つ。例えば先に挙げた英文に関して「果たして本当に It is glad とは言わないのか」といった教師の疑問もコーパスで確認し、生徒とともに考えることができるので、ノンネイティブの私としてはコーパスを使うことでとても強い後ろ盾を持ったような気持ちになる。

次回以降、このコーパスを使用した実践について詳しく報告していきたい。

is happy.”という文を作ってしまうのです。

限られた時間の中でコーパスを有効利用するには、名詞よりも動詞や形容詞を調べるのにコーパスを使うとよいと思います。生徒が間違った構文や意味で使いがちな単語をチェックして、コーパスで調べるとよい単語のリストをつくってあげるのもよいでしょう。

高校生のライティング上達のための

コーパス利用の試み

第3回

用例・共起語情報から語彙・文法への気づき

川村葉子
Kawamura Yoko
(福島県立原町高等学校教諭)

今井むつみ
Imai Mutsumi
(慶應義塾大学教授)

■コーパス利用実践例① 生徒の質問に答える

ある時、生徒からこんな質問を受けた。「history は不可算名詞ですよ。a long history の a は、あってもいいですけど、なくてもいいですよね!」そこで「英辞郎 on the WEB Pro」を利用して、形容詞が不可算名詞を修飾するとき、冠詞の有無で使われ方がどう異なるのか生徒と一緒に調べることにした。「英辞郎 on the WEB Pro」で“long history”を検索し、「整列」機能で KWIC (Key Word In Context) コンコーダンスを見る。コンコーダンスとは検索した語が前後のコンテキストと共に表示されたもののことである。

nation with a long history and deep relations
a country with long history and deep-rooted culture, which had a long history and did not allow migrants have a long history and from a powerful Jizoson has a long history and had been enshrined. Hisha Eve has a long history and has been held root in Japan's long history and has contributed. Shimabara has a long history, and is believed to

図1 「英辞郎 on the WEB Pro」で調べた long history の KWIC コンコーダンス画面

生徒たちは a がつかない long history もあることに気づく。検索語が含まれているもとの英文全体を表示することができるので、冠詞あり、冠詞なしの long history の英文をいくつか調べた。下記は冠詞なしの例である。

India is a country with long history and deep-rooted cultural heritage.

【出典】Hiragana Times, 1997年12月

次に「頻度集計」機能を用いて long history を調べる。long history と共起する語が頻度順で表示される。前後に表示されている語をクリックすると検索語を含んだ例文が表示される仕組みだ。

左2単語	左1単語	右1単語	右2単語
has 70	a 152	of 96	the 20
have 33	the 23	and 33	is 9
in 18	its 10	in 16	is 5
with 18	Japan's 5	as 7	is 5
had 7	with 5	that 4	its 4
of 7	their 4	the 4	Japan 4
is 5	very 4	being 3	was 4
enjoyed 3	has 2	also 3	and 3
such 3	of 2	but 2	conflict 3
throughout 3	one's 2	is 2	cooperation 3
country 2	our 2	originating 2	anticipate 2
despite 2	others 1	with 2	an 2

図2 long history と共起する語の頻度

これらを見て、冠詞の有無で違いは生じるか、あるとすればどう異なるか生徒に考えさせた。以下は生徒による分析(生徒の言葉のまま)である。

- ・ a long history は主語でなければ has の後ろが多い。
- ・ おおまかな long history は with と共起。
- ・ a long history of の形が多い。of と一緒に使う。
- ・ 個々のものについての歴史は a がつく。国や人類の歴史は a がつかない。

上記のように、生徒たちはその語彙・文法について仮説を立てる。「おおまかな long history」「個々のものの歴史には a」など核心に近づいたりもするのだが、文法用語やそもそもその概念を知らなかったり、誤った方向で分析していたりすることもあるため、教師が生徒の意見を聞きながら説明を加えることが必要である。

このように、コーパスを利用すると、コンコー

ダンスや頻度を見せたり、英文を調べたりしながら、語彙・文法について生徒に帰納的に考えさせることができる。

■コーパス利用実践例② During-Writing Activity でコーパスを使う

ライティングの活動では、ドラフトを書いている生徒から多くの質問を受ける。環境問題に関するテーマで書かせていた時、「先生、『大幅に』って英語で何と言えばいいですか。」と質問された。聞くと「漁獲量が大幅に減少する」と言いたいらしいが、辞書で引くと「大幅に」の候補がいくつかあってどれがいいか悩んでいるという。学習者用コーパス SkELL (Sketch Engine for Language Learning) を使って一緒に調べることにした。

SkELL にはコロケーション(どの語と共起しやすいか)がわかる Word sketch という機能がある。共起する語が品詞ごとにまとまって表示されるのでわかりやすい。

decrease verb		switch to decrease (noun)	
subject of decrease			
rate	population	percent	level
concentration	density	shear	revenue
production	crime	sa	
object of decrease			
risk	likelihood	rate	size
amount	level	cos	
temperature	consumption	mortality	appetite

図3 SkELL で調べた “decrease” と共起する語群

先ほどの「大幅に」を英語でどう表現するかについての質問だと、Word sketch の modifiers of decrease のところにある副詞を見ることになる。

modifiers of decrease			
dramatically	significantly	steadily	drastically
exponentially	rapidly	slightly	considerably

図4 decrease と共起する副詞

この Word sketch の機能はコロケーションをみることはできるが、意味的なつながりに関しては、学習者が自分で考え判断して、語を選択しなければならない。それぞれの語をクリックすると、その語を使用したコンコーダンスにジャンプすることができる。ここで自分が言いたいのが dramatically なのか、significantly なのか意味の違いを考えながら選んでいく。辞書は例文が1つだが、コーパスでは複数の例文の中で対象語がどのように使われているのかを確認することができ、語を多面的にとらえることができる。

生徒たちは、コーパスを利用して例文のコンテキスト、コロケーションなどを調べ、語彙の選択において同義語がいつも交換可能な形で存在するわけではないことや、日本語と英語が1対1の関係ではないということに気づくことができる。

■今回紹介したコーパス

・英辞郎 on the WEB Pro (<https://eowp.alc.co.jp>)
例文検索のほかに頻度集計、整列機能も使用できる(有料)。例文検索ができる英辞郎 on the WEB Lite は無料。ただし会員登録が必要。

・SkELL (<http://skell.sketchengine.co.uk/run.cgi/skell>)
学習者を対象として作られている。インターフェイスは全て英語だが、学習者のために選りすぐられたシンプルでわかりやすい例文が特徴。無料。

指導におけるコーパス利用のQ&A

上記の long history や decrease の件のように、コーパスを使って調べ、考えるこのような活動にはどういう意味があるのでしょうか。

今井の回答

long history か a long history か、をコーパスで調べる活動は、単にこの事例を可算にするか不可算にするかということにとどまらず、可算と不可算の「意味」を考えることにつながる活動だと思います。もともと生徒は a をつけてもつけなくてもどっちでもよい、と思っていたのに、この活動によって、「どっちでもよいわけではなく、意味によって、つけるかつけ

ないかが変わるのかも」という気づきを得ることができたらそれは大きく発展します。

後半の例も、「魚が減る」は fish is decreasing ではダメということだけではなく、日本語の曖昧さ、特徴に気づくだけでなく、英語に直すときには日本語の意味から考え直して文を組み立てることが必要、という英作文のもっとも大事なことへの気づきにつながります。

高校生のライティング上達のための

コーパス利用の試み

第4回

コーパスを用いて適切なフィードバックを行う

川村葉子

Kawamura Yoko
(福島県立原町高等学校教諭)

今井むつみ

Imai Mutsumi
(慶應義塾大学教授)

■ Post-writing Activity でコーパスを使う

ライティング活動で、生徒は教師からなんらかの corrective feedback (CF, 訂正フィードバック) を期待している。教師側は添削する際、何に焦点を当てるか、どのように CF を与えるかなど、フィードバックの方法で悩むことも多い。コーパスを利用することで、明示的に CF を与えるだけでなく、フィードバックをきっかけに生徒が自ら調べたり、英語の語彙・文法への気づきがあるなどの効果が期待できる。例えば、“my body temperature is hot” という表現を書いてきた生徒に、「hot 以外に high も使用可能？」というフィードバックを与えたところ、生徒は temperature が hot / high のどちらと共起し易いかを SkELL (Sketch Engine for Language Learning) で調べ、どちらも共起するが、ヒット数は high の方が多いと報告してくれた。

まず SkELL の Word sketch で temperature を検索し、adjectives with temperature のところにある hot, high をクリックすると共起するコンテキストが表示される。

temperature + high	0.37 hits per million
1 Why were temperatures higher 500 years ago?	
2 The color temperature is higher than incandescent lamps.	
3 In stellar interiors the temperatures are very high .	
4 Interior temperatures are much higher than along the coast.	
5 It follows that the optimal internal temperature is higher .	

図1 Word sketch の検索結果

図の右上部にヒット数が記載されているのにお気づきだろうか。temperature+high の組み合わせは図のように1億件中37件であるが、tempera-

ture+hot は1億件中6件であった。コーパスのよいところは、共起する語だけでなく使用頻度もわかることである。この生徒は頻度に関する気づきまでであったが、例文を比較させコンテキストによって使用される語の意味の違いに気づかせることもできるだろう。

また、1人1人に CF を与える添削のほか、生徒の共通した誤りに着目し、コーパスで検索しながらペアやクラス全体で話し合わせ、語彙・文法についての気づきを促すこともできる。

■ 日本語と英語の語彙の構造について
気づきを促す

学校に制服があることの是非についてライティングの活動を行った。「先生、『わかる』は find out でいいですよ」と、ある生徒。他の生徒数人も、「制服を着ることでどこかの学校に所属しているかわかる」、「人混みの中にもすぐわかる」の「わかる」をどうするかという問題に直面していた。生徒達が選んでいた語句は find out, know, distinguish, recognize, tell などである。次は生徒の英文 (原文のまま) である。

- we can know the school where they go
- you could understand the school name
- We can find out a student who belongs same school.

先ほどの生徒に英英辞書と SkELL で find out を検索させ、似たような例文があるか考えさせた。find out は形の上では正しそうだが、意味を確認すると、この場合 find out が最もよい選択肢とは言えないという結論になった。

このように、「わかる」が常に find out でよい

find him out	0.02 hits per million
1 No sooner had he shut the door than his wife found him out .	
2 He found him out in the garden, sitting on a wooden bench by the pond.	
3 But the wilderness had found him out early, and had taken on him a terrific fantastic invasion.	

図2 Word sketch の find out の検索結果

かという疑問を持たずに、日本語と英語を1対1の関係で暗記してしまっている生徒も多い。コーパスの利用により、例文を見ながら、その語句が使用可能なコンテキストを理解することができる。ただし、コーパスの限界もある。もともと生徒が知らない語、日本語をベースにした発想だと出てこない語については検索のしようがない。ここに英語教師の役割がある。この場合であれば「わかる」を表すことのできる英語をリスト化して調べ、英語と日本語のそれぞれの語の表せる範疇の違いをコンテキストの中で学ばせることができるだろう。

■ 英語の表現を豊かにする

ライティングの指導で気になることの1つは、生徒の I think の多用である。エッセイの中に何度も、“So, I think that...” が登場する生徒も少なくない。因果関係の是非にかかわらず、「～ので」「だから」は so になるし、「～と思う」は I think になる。次は生徒が書いた英文である (原文のまま)。

- So, I think that people should not be allowed to go on tours to protected environments.
 - That's why, I think that I want to live only myself.
- 受容語彙として insist, believe, be afraid, ex-

指導におけるコーパス利用のQ&A

find out や think の例のように、生徒にはある日本語には決まった英語を当てはめるという行動が見られますが、この背景には何があるのでしょうか。

今井の回答

母語でも語彙が貧弱な人は同じことばしか使わない傾向があります。言語の複雑さ、豊かさに気づきがなく、ことばを場面、文脈に応じて使おうという気持ちが弱いことが背後にあると思われます。

普段生活で使わない英語はことばの使い方まで意識を向ける余力がなく、とにかく文ができればよいという気持ちになりがちです。よって、日本語の単語に

pect などを知っていても、いざ自分が書く段になるといつも I think が登場する。加えて、I think を使用する場面は意見を強調したい時、結論部で意見をまとめる時であると考えている生徒もいる。語彙や文法の指導だけでなく、文章の構成という、よりマクロな視点で考えさせていくこともエッセイライティングの指導の醍醐味である。英語の表現をもっと豊かにするために、あるいは自分が伝えたいことを最もよく表す語彙の選択のために、視覚的に複数の語が提示される SkELL の Similar words (図3) という機能を使うこともできる。

think	verb	switch to think	(noun)					
know	believe	see	want	say	find	do	feel	like
choose	expect	come	work	suggest	make	understand		
describe	need	ask	learn	remember	mean	meet		
claim	make	feel	consider	put	need			
believe	help	find	keep					
have	work	want	keep					
know	go	be	give					

図3 Similar words で表示された think の類義語

「この表現だと読み手に言いたいことが通じない」というフィードバックをきっかけに、なぜ通じないのか、どのような誤解が起こり得るのか、どういった表現が可能なのか、英語と日本語の語彙・文法の構造の違いは何なのか、コーパスの例文を参考に議論ができると、深い学びに繋がるのではないだろうか。

あてはまる英単語をひとつ覚えると、それ以上探索しようとしません。英語の単語が、辞書に挙げられた日本語の単語とまったく同じ意味だと思い込み、日本語の文型に無理やりあてはめて “Present is happy.” のような作文をしてしまうのも、同じことが原因です。

高校生のライティング上達のための

コーパス利用の試み

第5回

コーパスを学習に取り入れる意義

川村葉子

Kawamura Yoko
(福島県立原町高等学校教諭)

今井むつみ

Imai Mutsumi
(慶應義塾大学教授)

■コーパスを使って語彙の文法的側面を理解する

語彙と文法の指導を切り離してはいけないと実感した例がある。ある日、単語帳の小テストでこんな問題を出題した。

- ・この絵はいくらの価値がありますか
→ How much is this painting ()?

正解は worth なのだが、生徒から「precious ではだめですか」「value はどうですか?」「worthy は?」と質問が出た。文法的側面を考えず、意味的に近いから使用可能なのではと考えたようである。そこで生徒達と SkELL (Sketch Engine for Language Learning) で worth を検索することにした。

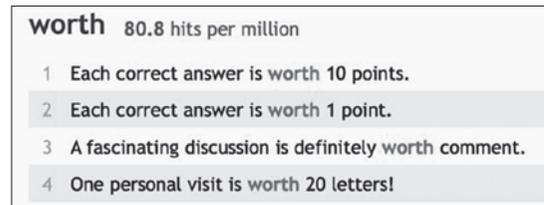


図1 SkELLでworthを検索した結果の画面

ペアで例文の構造や意味を話し合わせ、worth の品詞や用法について考えさせた。辞書も引き、辞書によって worth は形容詞だったり前置詞だったり品詞の分類や説明が異なる場合もあること、precious や value には worth のような使い方がないことを確認した。コーパスを使ってたくさんの例文を読むことで、語彙と文法は別個の学習領域なのではなく、切り離せないということを帰納的に考えさせることができる。

■言語によって語彙の範疇が異なることに気づく

6月号本欄でも話題にした decrease についてである。ライティングの授業で机間指導中に「魚が減る」の意で fish are decreasing としている生徒が数人見られた。「fish are decreasing でいいかな?」と気づきを促しても何がよくないかわからない生徒達。そこで SkELL の Word sketch で decrease の主語になる語を検索した。

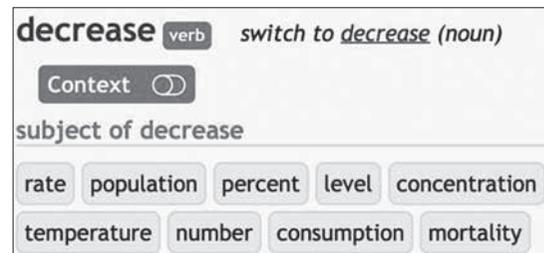


図2 SkELLのWord sketchを使用した検索結果

日本語では「減る」のは「魚」でよいが、英語で decrease するのは number や population である。生徒達に decrease の主語になれるものの共通点は何かを考えさせ、日本語の「減る」と decrease の表す範疇の違いに気づかせることができた。

全ての学習語彙についてコーパスを使用して検索することは現実的でない。事前計画をし、コーパスを使って学習させる語を教師が決めておくのがよいだろう。また、上記のように1つのトピックについて生徒が意味重視で書く活動をしている中で出てきた共通のエラーは Focus on Form のよい機会でもある。この機会にコーパスを用いて活動を行い、深い学習に結びつけることができる。

■コーパスの難しいこと、できないこと

コーパスは、調べたい語や調べさせたい語があって初めて検索し、そして例文表示となる。計画性がない、あるいは計画的であっても、何を求めてどのように検索するのか、検索結果を通して何を教えたのか考えずに授業で使えば、コーパス学習はうまくいかないだろう。コーパスを使用して授業を進める場合は、教師が事前に調べる語や手順、生徒に行わせる活動を計画したり、ある程度までコーパスの諸機能に明るくなっている必要がある。

7月号本欄では「わかる」を英語でどう表すかの事例を掲載した。生徒は日本語を頼りにしたり、辞書などで日本語に該当する英単語を探すため、find, distinguish, tell, understand 等自分が語彙として持っているものだけを書いたり検索したりする。未知語や産出語彙でないもの、例えば「見ているところにいることがわかる」の意の spot のような語が使用可能なことに気づくのは難しい。

このように、ライティング活動をするときにコーパスだけではうまくいかないことも多い。辞書や参考書を併用したり、教師からの明示的な指導が必要な場面もある。

■コーパスを使った授業の実践を通して

語彙・文法指導において、語彙・文法そのものを教えるだけでなく、将来、生徒1人ひとりが自立した学習者になることができるような能力を身につけさせたい。

コーパスを使ったライティングの授業において、

指導におけるコーパス利用のQ&A

リストや単語帳と比べ、コーパスを使った授業は時間がかかります。しかし、教室でそのような活動をする事で語彙・文法そのものだけでなく力も身につくと感じましたが、いかがでしょうか。

今井の回答

使える英語を身につけるためには、意味の似ている単語、辞書で並列して挙げられている単語を何となく使えばよいというわけではなく、単語が使われる構文の知識が欠かせません。文法と語彙は別々にあるのではなく、文法が単語1つ1つの意味と融合してこそ英語が使えるのだということに生徒は気づく必要があります。

しかし文法的な構文の知識だけでは自然な英語は書けません。その単語を使った例文を探し、共起語――

生徒が協働で例文を見ながら「これはこういうことかな」と帰納的に類推をしたり、当該の語彙・文法について「この語はこう使うのではないか」と仮説を立てたり、批判的に思考するプロセスを体験している姿が見られた。学習している内容自体は特定の語彙・文法固有のものについてであるが、このプロセスを通して得た能力は汎用性があり有効であると感じた。

語彙・文法の学習に王道があるわけではなく、様々な場面で様々な方法で学習していくことが大切なのは周知のとおりである。コーパスをもう1つの選択肢として語彙・文法学習に取り入れることも有効であると言える。

生徒と母語を同じくする教師がライティングの指導に臨むことは強みにもなる一方、英語ネイティブスピーカーではないため、英語の表現で悩むことも多い。その意味では、生徒も教師も学習者である。外国語として英語を学ぶ環境にいる学習者にとって、コーパスを使って学習すれば、語句のコロケーションや頻度を知ることができ、その語句を文脈の中で学ぶことができるほか、英語のインプットの絶対量を増やすことにつながる。今後も、辞書や文法書など様々な情報リソースに加えて、コーパスを使った指導を実践していきたい。

4回にわたりコーパスを使用した授業の実践報告を行ってきた。次号では、今井先生へのQ&Aという形で、私が現場で感じている素朴な疑問や、経験的に効果を感じていることなどについて認知科学の視点からの回答をご紹介します。

動詞なら特に主語と目的語、形容詞なら修飾する名詞――に注目し、例文の文脈から自分で意味を考えると癖をつけることが「使うことができる英語力」につながるのです。

日本語から辞書を引いて出てくる単語は何でも使える、という認識を捨て、文脈にもっとも合った単語を探そう、という認識がコーパスを用いた活動で育ちます。

高校生のライティング上達のための

コーパス利用の試み

第6回・最終回

コーパス学習で
アクティブ・ラーニングをするためのQ&A

川村葉子

Kawamura Yoko
(福島県立原町高等学校教諭)

今井むつみ

Imai Mutsumi
(慶應義塾大学教授)

前回までに汎用コーパスの SkELL や英辞郎 on the WEB を使って生徒の質問に答える方法や、ライティングの指導にコーパスをどう活かせるかに触れてきました。最終回は認知科学者の今井先生との Q&A を交じえてコーパスが語彙・文法指導に資する可能性を考えてみたいと思います。

■単語の学習＝暗記でよいのか

過日、私の勤務する高校に、フレッシュな教育実習生たちがやってきました。熱意に溢れ一生懸命な姿に心が洗われるようでしたが、1つだけ気になったことがあります。教育実習生の指導案の「単語を暗記させる」という表現です。高校生の中にも単語は「暗記するもの」と捉えている生徒がいます。語彙・文法の学習において、最終目標は「使えるようになること」だと思います。与えられた文脈や共起する語などから、どの単語をあるいはどんな表現を使うのかは必然と決まってくるもので、そういった語彙・文法を選択ができることが「使える」ことだと考えます。高校時代に語彙・文法を学習するとはどのようなことなのかを授業を通して体験させ、教室の外であるいは卒業後も、自立して語彙・文法を学習していける生徒を育てたいと思っています。

Q. そもそも「暗記」とは何なのでしょう。なぜ私は「暗記」に違和感を覚えたのでしょうか(単語は「暗記しよう!」でいいのでしょうか)。

今井の回答: 母語の単語の意味は、文法的な構文や、その単語が使われる状況の知識、その単語と意味は近いけれど区別して使わなければならない類似の単語、など様々な知識を包含した

豊かな知識になっています。そのような豊かな知識は、子どもが個々の単語の意味を覚えるときにいっしょにつくられます。例えば、子どもが母語の動詞を覚えるときは、まず構文と名詞(主語と目的語)に注目し、そこから動詞の意味を考えます。だから動詞を使う上で最も大事な構文、共起する名詞についての知識は、その動詞の意味といっしょに記憶されるのです。形容詞は、それが修飾する名詞との関係で意味が決まります。意味を文脈から自分で考える子どもは、ごく自然に形容詞の意味を、共起する名詞とセットで覚えます。

翻って、英語学習者が「英語の単語を暗記する」と言うとき、一般的には、単語のスペル、発音に対して日本語訳を貼り付けたものを暗記する、ということが行われます。そのとき、文法的な構文や、共起する単語、文脈などにはほとんど注意を向けません。このような暗記をしても、英語は使えません。8月号の本欄で、How much is this painting ()? の中に、正解の worth のほか、precious, value, worthy など、構文的に不可能な単語が次々に挙げられたことをご紹介しました。生徒たちは単語の構文に注意を向けず、日本語訳だけを暗記したので、このように考えてしまうわけです。

一方、すべての暗記が悪いわけではありません。プロ棋士の島朗九段は、『島研ノート 心の鍛え方』(講談社, 2013) の中で、棋譜の暗記についてこのように述べています。「指定図書の中からまず一冊、一局ずつ勝った側から並べ、次に負けた側から並べる。そして暗記して棋譜

に書き出し、何も見ずに並べて一局が終了する。都合四回ほど同じ将棋を言葉のほんとうの意味の通り、精密に調べる方法だ……」島九段は暗記ということばを使っていますが、その意味合いは、通常の暗記とはまったく異なります。1つ1つの駒の配置の意味を考え抜いたうえで覚える。このようにして覚えた配置は、「生きた知識」となり、必要な時にすぐに思い出せます。

英語の単語の暗記も同じです。コーパスの文例からその単語が現れる構文、共起語、文脈などに注意を向けながらその単語の意味を精査すれば「生きた」知識になります。暗記自体が悪いのではなく、暗記のしかたが大事なのです。

■アクティブ・ラーニングとは?

高校の授業でコーパスを使用して見て、効果的だと思われる点が語彙・文法の学習という観点に加えていくつか挙げられます。生徒たちがたくさん例文を見たり、主語や目的語の結びつきを協働で考える際、お互いの仮説を話したり、意見交換をしたり、やり取りを通して帰納的に「こういうことなのではないか」と結論づけたりするという行動が見られたことです。その話し合いの内容が必ずしも正しかったとは限りませんが、そのレベルも高かったわけではないのですが、高校生が自分たちの知識の中で比較、検討している姿を見て、アクティブ・ラーニングとはこういうことかもしれないと考えさせられました。授業の中にコーパスを取り入れたことで、教科固有の知識だけでなく、批判的思考や、根拠に基づいて考えるという科学リテラシーのような汎用的なスキルも育てることにつながったのではないかと思います。また、話し合いをしているときの生徒たちは楽しそうでもあり、「学び」＝「楽しい」という本来の姿を見たような気がします。

Q. コーパスを使用した学びについて今井先生は認知科学の視点から、どのように考えますか。

今井の回答: そもそも外国語は批判的思考を働かせないと学習できません。英単語の意味を理解するとき、つい日本語の対応する語の意味をベースにしてしまうからです。例えば, forgive, excuse, permit, admit, approve, accept

はみな「許す」という日本語を当てることができず、意味はまったく異なります。しかし、多くの生徒は同じ訳語が当てられる英単語はみな同じ意味を持つと思ってしまう。「単語は暗記するもの」と思い込み、批判的思考を働かせて意味を考えていないからです。コーパスを使って多くの文例や共起語のパターンから、同じ日本語が当てられる英単語の意味の違いを自分たちで考えることで、同じと思っていた単語の意味が違うことに気づき、単語同士の使い方を対比して、意味の違いを探っていくようになると思います。それこそが、批判的思考を働かせたアクティブ・ラーニングです。

生徒たちはそこからさらに、英語話者としての単語の意味の「似ている」は必ずしも自分たちと同じでないことに気づくようになります。その気づきは、異文化を理解しようとする態度につながります。また、英語、日本語と言った個別の言語を超えて、言語そのものの面白さにも気づくようになるのではないのでしょうか。言語の面白さ、奥深さに気づけば、日本語のことばの意味にも今よりも注意を向けるようになるでしょう。それはもちろん、批判的思考を働かせながら自分の考えを的確に文章にまとめる力にもつながります。

筆者(川村)はこれまでコーパス使用の良い効果について触れてきましたが、効果のなかった例もいくつかあります。happy と glad を検索させたものの、コーパスの例文からは使い方の違いがはっきりわからず、結局教師が説明したということがありました。生徒にどのような議論をさせて、着地点をどこに設定するのか、いかに介入し全体をまとめて行くかを考える計画性が重要です。

このような失敗例を考慮に入れても余りある効果がコーパスには期待できると私は考えています。語彙・文法の指導はコーパスのみでよいということでは決してありません。大切なのは、コーパスはあくまでツール(しかもことばの面白さに迫ることのできる)の1つであるということだと思います。日々、生徒や学生の語彙・文法指導を研究されている先生方にこのコーパス使用の実践例が少しでも参考になれば幸いです。